

『責任という原理』における多様性の概念

清水 俊

I. はじめに

「グノーシスの私の仕事において、私の作品（Gesellenstück）は、後期グノーシスの衰亡における定められた歴史の要素について、とりわけ人間の現存在の理解への解釈方法の実存分析というハイデガーの哲学の利用であった」（Jonas 2003, S. 117）と語られているように、ハンス・ヨナスの初期研究の関心はグノーシス主義とハイデガーの現存在分析論の融合であった。しかしナチスの台頭に伴いヨナスはドイツを逃れることになり、ハイデガーはナチス政権下で重要な役割を担っていった。後にヨナスはハイデガーについて次のように述べている。

だからこそあの時代のかの深遠な思想家が、褐色シャツ大隊の怒濤の行進に歩調を合わせようとしたとき、彼個人に幻滅したばかりではなく、哲学の敗北すら私の目に映ったのだった。そこではひとりの人間ばかりか哲学もダメになった。（ヨナス 1996, pp. 26-7）

ハイデガーとの別れと共に、英語圏での研究がヨナスの転機となり、彼の哲学は二元論批判へと向かっていく。ヨナスによれば、自然哲学は自然を無視し、科学は精神を無視するが、そのような態度からは世界の本質は見えてこない。ヨナスはその研究の対象を「有機体の哲学とその古くさい実存のほうへと転向」（David 2002, p. 4）したのである。

ヨナスの最も有名である著作『責任という原理』（1979）は、このような人間論と有機体論の二段階の研究を経た後に執筆された。

われわれの力がある仕方では発展することによって、人間の行為の本質が変化した。そして倫理学は行為とかがわるのだから、私は更に次のことを主張しなければならない。すなわち、人間の行為の本質が変わったことによって、倫理学の方でも修正が要求される。（Jonas 1979, S. 15）¹¹

ヨナスはさらに、「新しい使命に着手するうえで確実なことは、哲学が自然科学と密接な連携をとりえることである」（ヨナス 1996, p. 33）と言う。科学技術の発展に伴い、ヨナスは哲学と自然科学との実践的な関係を模索し、新しい倫理学を確立する必要性を感じた。『責任という原理』の中で展開される形而上学は、ヨナスがそれまで研究してきたグノーシス主義、現存在分析、有機体の存在論

的解釈の影響を色濃く受けている。「責任という原理」における倫理学の特徴を考察するには、このことを踏まえる必要がある。

ヨナスはこの本で形而上学の必要性を説き、目的論的な視点から世界像を構築しようとしている。「この倫理学の根拠付けは、形而上学にまで達しなければならない」(Jonas 1979, S.8)のである。またヨナスは存在には存続しようとする目的があり、存在は自らを肯定すると述べる。次に、存在は無から身を遠ざけるため、目的が備わるという性格を最大化させ、多様性(Mannigfaltigkeit)を目的化させると考えている。(Jonas 1979, S.156)「責任という原理」を理解する上で、私はこの多様性という概念をキーワードとしたい。もし存在の目的が最初のレベルで終わっていたならば、存在はただ存在すればよいことになり、様々な在り方は維持される動機をまったく持たないことになる。われわれ人間も、人間として存続していく必然性を失ってしまう。存在の存続という目的から多様性の維持という目的への橋渡しは、人間の存続を肯定するためには避けられない作業となっているのである。

だが多様性が目的となることもまた、人間に対する危機をもたらす可能性を含んでいる。なぜならば多様性が目的となっているということは、現在の在り方が維持されるよりも、その在り方から様々な在り方が生み出される方が存続に適しているとも考えられるからである。むしろ多様化の現出にとって、現在の在り方が維持されることは邪魔でさえあるかもしれない。このような状況下では、人間という在り方も多様性のうちの一つに過ぎず、そこから新たな在り方を生み出すことこそが課題となってしまう。ここには人間が人間を保持するための倫理が必要とされない。

ヨナスはこのような危機に対して、種のエゴイズム(der Egoismus der Art)という答えを用意している。

次から次へと起こる人間と自然との生存競争で、選択されるのは人間の方である。自然には、独自の尊厳が認められても、もっと高い尊厳を持つ人間の二の次にされる。あるいは、「もっと高い」権利という観念が否定されとしても、自然そのものに従って種のエゴイズムは絶えず進行する。(Jonas 1979, S.246)

多様性を支持しながらも個々の種は自身こそが生き延びようとし、そのために自己肯定の力を発揮する。多様性が生じながらもそれぞれの種は自らを優先するため、ある程度個々の種は維持されながらも、新たな種も生じるのである。(Jonas 1979, S.246-7)ここで「種」と表現しているように、この概念は生命種に対する考察から得られている。²⁾ただ、生命における在り方がどうして存在一般についても言えるのか、この疑問は「責任という原理」に常につきまとうものである。

ヨナスが存在論的目的論から倫理を導出しようとする限り、多様性の概念が生命の段階を越えて存在一般にも適用できなければならない。果たして存在論上の多様性の概念がヨナスにどのように捉えられているのか、その解明と共に、ヨナス理論における多様性の概念を適切に修正するのが本稿の課題である。

II. 人間論からの脱却

世界内には様々な在り方があり、多様性が事実あるということに異論はないだろう。しかし従来の哲学は暗黙のうちに人間の特権性を認めており、多様性そのものの意義と多様性の一部としての人間

の関わりを考察することはなかった。ヨナス自身、グノーシス主義とハイデガーの現存在分析の研究という、人間の側から世界を考察する試みに当初は従事していた。だが同時に、科学知から新たな見地を得ることも重視していたため、人間に傾倒しすぎる哲学には限界を感じ始めたのである。

ハイデガーは『存在と時間』（1926）において「存在の意味への明確な、わかりやすい問題提起は、存在するもの（現存在）を、その存在に関して前もって適切に明らかにしておくことを必要とする」（Heidegger 1926, S. 7）と述べている。現存在＝人間は存在を問うものとして特別視され、現存在を分析することが存在そのものを問うことにつながると信じているのである。他方ヨナスは、「グノーシスの役割とハイデガーにおける現代的哲学での現存在分析とを比較することに私は興味を引かれた」（Jonas 1991, S. 92）と述べ、ハイデガーの現存在分析の成果に加え、グノーシス主義も人間論的に解明しようと試みた。³⁾ ヨナスによってハイデガーの現存在分析は、グノーシス主義の謎を解くための道具として使われたのである。

だがこのような、ハイデガーとグノーシス思想に対する人間論的解釈から存在を探求する試みは長くは続かなかった。一つには前述のように、ナチスに加盟するハイデガーとユダヤ人であるヨナスの間にできた大きな溝が原因に挙げられる。ヨナスは心情的にハイデガー哲学の態度から身を引き離れたかったであろうことも予想される。しかしそれとは別に、ナチス政権下の状況そのものがヨナスの思想の転機となった。ドイツから逃れざるを得なかったヨナスは、志願して軍隊に参加しドイツとの戦闘に加わった。また彼は、母親をアウシュヴィッツで失うという悲劇を味わった。より濃密に戦争を経験し、人間の死を身近に感じたことから、ヨナスは人間をより精神的なものとして捉える傾向に対して疑問を感じるようになった。

ハイデガーの哲学でもまた《腹が空いた》という言葉を手中に収める術をもたなかった。死すべき定め、という極めて抽象的なことがそこで考察された最終的な回答であり、それがわれわれをして厳粛に実在させるはずだった。実在の具体的な根拠を無視したまま、内面ばかりに目を向けたこの解釈は、そもそもここには倫理学に通じる恵み豊かなお導きがあるのだ、とすつとほけていた。しかし実はそんなものがないので、むなしい決定論にはまりこんでいたのだ。（ヨナス 1996, pp. 21-2)

ヨナスは、人間は身体との密接な関係の上に成り立っており、何よりもまず自然的存在であると考えようになり、観念的なだけの存在論とは決別しようとしたのである。

もともと科学知に対して積極的な受容の態度を示していたヨナスにとって、精神的存在としての人間の優位性が存在認識に直接結びつくという考え方を支持することには限界があった。特に人間の特権的な地位を脅かしたのは、進化論（ダーウィニズム）の発展である。進化論により人間と他の生物の間の垣根は取り去られてしまった。人間に残されたのは人間特有の個性のみであり、人間を解明することは生物種のうちのただ一種について解明することに過ぎなくなってしまった。

多様性の概念も進化論から生まれた。進化論以前には、生命種は不変なものであり、その在り方は神から与えられたものだと信じられていた。しかし進化論によって生命種は変化し、また多様化すると考えられるようになった。ヨナスがダーウィニズムから強く影響を受けていることが、次の箇所か

ら伺える。

有機体の生命において自然は関心を表明してきたが、有機体の生命がとる形態はとも多種多様であり、この形態の一つ一つが存在と欲動の性質である。こうした多様性の中で、自然は持続的に、相応の失敗や絶滅という犠牲を払いながら自らの関心を推し進めてきた。(Jonas 1979, S. 156)

進化論の核となる考え方は、従来の種から様々な新しい性質が生み出され、適応するものだけが保存されるというものである。ヨナスも多様性によって存在は存続の可能性を広げ、より適した在り方が保存されると考えている。ただしダーウィニズムとヨナスの形而上学の間には決定的な違いがある。ダーウィニズムが多様化を生命の有する事実として捉えているのに対して、ヨナスはそれを生命が存続するための手段と考えている点である。

進化論は科学的であるために意識的に目的論を排除した。そのため進化論における多様性は、生命種を結果として進化させはしても、進化させるためという能動性を有するわけにはいかなかった。目的が介在しない以上、生命そのものの保存も目指されてはいない。個々の種にしても、結果として競争しているように見えるだけで、種として繁栄しようとする意志が働いているわけではない。¹¹

ヨナスは、生命の在り方から世界の性質を探ろうとしていたため、多様性の持つ意味についても考察した。そして生命は死する運命にあるがゆえに、死から逃れるための手段を講じる、そのために生命は多様化という手段をも試みるのだ、と考えるようになったのである。

生命は、自らにたえず現前するアンチテーゼとして、つまり脅威として、非存在の可能性を自らのうちに抱え込んでいる。生命の存在の様態は、行為による保存である。全ての欲動の持つ「然り (Ja)」は、ここでは非存在に対して積極的に否と言うことを通して先鋭化される。(Jonas 1979, S. 157)

ヨナスの関心は人間を越え、自然へと広がっていったわけだが、実際にはハイデガーとグノーシス研究をしていた時代の負の遺産を背負い続けることにもなる。その点は「責任という原理」で倫理を扱うに至って顕著に表れることになる。

Ⅲ. 有と無の対峙

ヨナスは生命の在り方を参考にして存在論を考察しているが、存在そのものにとっての多様性とはどのようなものとして捉えられているのだろうか。このことの解明については、彼の存在論のうちでも特徴的である有と無についての記述が示唆的である。

このような存在と非存在との差異は、何物かが無と異なる（この違いであれば、その何物かが何でもよい以上、二つの何でもよいもの間のどうでもよい違いでしかないことになる）という点にあるというよりも、何らかの目的関心がそもそも中立無関心とは異なるという点にあり、無は、この中立無関心さの絶対的な形態と見

て取ることができる。中立無関心な存在というものは、無意味であるという汚点がついているため、無の形式であり、本来とても考えられないようなものである。(Jonas 1979, S. 155-6)

ここで、生命における生と死の関係が、存在における有と無の関係へと発展させられている。だが、ヨナスの有と無に関する認識は一種独特のものを含んでいる。有と無は、自らに関心があるか、ということで区別されるというのである。たとえ存在が在ったとしても、その存在が中立無関心である場合には世界は不完全な形の無であるという。実際にはわれわれの世界は有であり、世界が無である状態は想像するよりない。われわれの世界のように多様性を含んだものだけが有でありうるのか、それともただ一点の、中立無関心で多様化を目指さないような有も存続可能なのか、証明は不可能である。しかしヨナスは、実際に世界には空間的、量的、質的、そして時間的な広がりがあることから、有にはそのような在り方が必要なのだ、と考えている。ヨナスにとって有か無かの区別は、0か1かという状況からではなく、0にとどまろうとするか0から離れようとするか、という態度によって判断されている。これは、1であるから有であるという理論上のものではなく、1から更に増殖しなければ常には1以上でいられない、という実際の在り方を想定しているのである。

ヨナスの世界観を基にすれば、有は常に変化をしなければ有でなくなる。空間的、量的、質的、時間的変化が持続されることにより、有はより有の存続の可能性を広げられ、逆にどれか一つでも変化がなくなれば、無へと沈み込んでしまう危険が大きくなる。しかし存続が目的である以上、存続に適した在り方の維持も必要である。もし多くの在り方が存続に適しない在り方へと変化してしまえば、一気に有は無へと転換してしまうだろう。そのために有はただ変化するだけではなく、多くの在り方を試しながら、適した在り方を維持していかなければならない。多様性の目的化と共に、在り方そのものが維持を欲求することが必要となるのである。

進化論の考え方は、一見ヨナスの世界観に非常に適合するように感じられる。生物は遺伝子により性質が受け継がれながら、突然変異により変化の契機が訪れる。そして生み出された様々な新しい性質のうち、自然に適応したものが生き残り、また受け継がれていくのである。

だが前述したように、進化論には目的が介在しないため、適応は偶然そのようになるだけのことに過ぎない。他方ヨナスは、多様性も目的ならば、個々の在り方も自己自身を目的とし、エゴイズムを貫き通すと考えている。

自然の利害関心は、種の多様性という外的な広がりの中に表明されるよりも、どちらかと言えば、生物そのものの備える様々な自己目的の内的な強度の中でこそ表明される。生物の中で、自然目的は主観性の度合いを次第に強めていく。つまり自然目的は、この目的の遂行者にとって自分自身の目的となる。(Jonas 1979, S. 156-7)

ここで、一つの問題が生じている。ヨナスは「多様性の中で自然は持続的に、相応の失敗や絶滅という犠牲を払いながら自らの利害関心を満足させてきた」(Jonas 1979, S. 156)と述べており、目的を果たすことのできない在り方があることを認めている。進化論では目的の力が介在しないため、無

作為の多様性の中から環境に適したものだけが生き残ることによって、結果としての変化が実現される。他方、ヨナスの理論によると、変化自体は多様性を必要としない。多様化と変化は別々の作業であり、その結果存在の存続に適した多様性が維持されると考えているのである。だが、多様性は失敗や滅亡を見越して求められているにもかかわらず、生み出された新しい在り方自身がエゴイズムを実現させるための力を発揮できるということは、矛盾をはらんでいる。新しい在り方の全てが適応を目指し、さらにそこからまた多様化が起これば、存在の在り方はどこまでも細分化してしまい、適応したはずの在り方に対応する物質の量も不安定なものになってしまう。もしくは在り方は目的の力を発揮しながらも大部分は失敗する、という間抜けな状態が想定されてしまう。何故存在は目的を実現させる力を有しながら、このような回りくどい方法で存続しようとするのだろうか。ここから、ヨナスの多様性の概念は、不完全であると言わざるを得ない。果たして存在は多様性に何を期待し、どのような力を与えたのか。そして多様性に与えられた本来の目的はどのぐらい達成できているのか。多様性が目的化されることが存在の存続という目的にとって本当に好都合なのかどうか、ヨナスの記述からは解読できないのである。

さらに、多様化における「相応の失敗」とはどのようなものかもわれわれには想定できない。例えば具体例を挙げれば、原子の種類には確かに多様化の痕跡が見える。空間的・量的・時間的な要件を満たすためだけならば、ヘリウムのみでことは足りたはずである。しかしヘリウムが存続に適さなくなる恐れから、水素以下の様々な原子が生み出され、質的な豊富さが実現された、と考えることができる。問題なのは、これらの原子が実際にはどれも失敗作には終わっておらず、現在のところ欠番が見当たらない、ということである。この事実から、二つの推論が立てられる。一つには、多様性の目的化によって生まれた新しい原子は、自らの在り方を保持するための目的の力を使うことにより、例外なく今日まで存続することができた、というものである。もう一つは、存在は最初から必要な原子だけを生み出した、というものである。どちらを支持するにしても、ヨナスの形而上学は修正を迫られることになるだろう。

生命において見られる失敗や滅亡が存在の中ではどのような形で見られるのかについてわからなければ、存在における多様性の意義を認めることはできない。ヨナスはこの点についての説明を怠っている。

ヨナスは自然科学との密接な連携の必要性を感じていたが、肝心なところで、自然科学から力を借りることを忘れていた。ヨナスは有機体の存在論的解釈に頼るあまりに、存在の存在らしさについての考察を怠っているように思われる。生／死の関係が単純に有／無に適用できないように、多様性の概念も生命から存在へとそのまま持ち込める概念ではない。にもかかわらずヨナスは、生命の在り方の中に存在の在り方が顕著に現れていると考え、そこからほとんど修正を加えないまま存在の形而上学を組み立ててしまったのである。

『責任という原理』における形而上学は、倫理学を確立するために組み立てられた。ヨナスは人間が人間の領域を越えて自然全体に影響を及ぼす力を得てしまったとの認識から、自然科学の理論的考察を越え、形而上学を基礎とした倫理学を考える必要性を感じるようになったのである。

かくして精神と自然との和陸という理念について考察せねばならない。それを実現するには人間は多くのものを放棄せねばならない。人間はそれらを当たり前のこ

とく傲慢にも自分にも権利があると思いついていたのであった。ここに哲学本来の試みが増えられる。すなわち存在のある一つの包括的な解釈を作り出し、その中で可能なかぎり責任の義務を理性的に根拠づけること、またその義務が下す命令は創造の謎が許すほどに無条件であることを確信させるのである。(ヨナス 1996, p. 41)

それまで存在一般を知るために人間論、有機体論を扱ってきたのに対し、「責任という原理」においては倫理学の確立のために存在論が扱われるようになっている。ただしその存在論も有機体論を主な基盤として成り立っている。ヨナスは、最上部で表れるものが、すでに下部の内に潜在的に存在している、と考えている。「最も乏しいものではなく最も完全なものから、つまり、我々に近付きうる最高のものから存在とは何かを理解しなければならぬ」(Jonas 1979, S. 136)と云うのである。またヨナスはここにいたっても人間を「最も高等な有機体」と定義している。(Jonas 1979, S. 137) ヨナスにとって最上部である人間から最下部である存在一般の在り方を探ることの正当性は、まだ保たれているのである。このことが、自ら批判することとなったハイデガー哲学の、(特別ではないとは言え、最も高等である)人間から存在を探る試みに信頼を置くという過ちを繰り返しているのである。

純粹に上部のものから下部のものを推測するためには、そもそも何が上部なのかについて検討しなければならない。ヨナスは人間を最も高等な有機体と呼ぶが、それは人間に表れている主観性が「高度に発達した自然の表面現象」(Jonas 1979, S. 142)だと考えているからである。これでは人間が高等なので主観性を高等だと考えていると同時に、主観性が高等な自然現象なのでそれを有する人間を高等だと考えることにもなる。ヨナスは人間から特権性を奪い去ったが、人間が最も高等であるという新たな基準を設けてしまったのである。

実際には多様性から生まれる在り方が高等である必要性はどこにも説明されていない。あくまで存在が非存在から身を遠ざけるためにより多くの在り方が目的とされるのであって、在り方の内容は問われていないのである。「多様であること」が重要である以上、特定の尺度をもって在り方の下等と高等を判断することはできないはずである。

人間のうちに表れている主観性が存在のうちにもすでに内在されているとしても、存在における主観性の重要度がどれくらいなのかはわからない。存在する在り方におけるあらゆる性質は、等しく重要かもしれないし、重要ではないかもしれない。

またヨナスは表向きには人間から特権性を奪い去ったものの、今度は生命に特権を与えるという権利の移譲作業をしたに過ぎなかった。

生物の中で、自然目的は、主観性の度合いをどんどん強めていく。つまり自然目的は、この遂行者のそれぞれにとって自分自身の目的となる。この意味で、感覚を持ち欲動する存在は、単に自然の目的であるだけでなく、目的それ自体である。(Jonas 1979, S. 157)

上述のようにヨナスは自然の中にこそ存在本来の目的が現れていると信じている。だが他方で、生物が多様性を必要とするのは、失敗や滅亡する種が存在するからであるとされている。すると、生物

の在り方の中には、存続という目的を果たせないものがあることになる。しかしここに上部のものから下部のものを推測するというやり方を当てはめると、矛盾が生じてくる。上部のもの、その在り方がそもそも目的を果たすのに相応しくない場合があるとすれば、われわれはどの在り方が目的の達成に適しているのかを推測しなければならなくなる。しかし目的自体は上部のもの、その在り方から推測しなければならないため、とりあえず目的に即しているであろう在り方をも推測しなければならなくなる。これでは結局何が目的なのか、どれが目的に適した在り方なのか、根拠によって論証することはできないだろう。

このように、ヨナスは生命の性質にこそ存在の目的が顕著に現れていると考えたものの、その根拠についてもはっきりとしないままなのである。なぜなら生命こそ上部のものであるということも、生命に現れている目的が存在本来の目的であるということもはっきりとは説明できないからである。

ヨナスは人間や生命という在り方のほうが失敗だという可能性は考えていない。だが彼の理論に整合性を持たせるためには、その可能性についてももっと検討しなければならなかったはずである。ヨナスは人間存在の絶対的な肯定だけはどうしても譲らない。だが、人間は失敗作であろうとも、全ての種はエゴイズムを貫くと考えているのだから、人間が存続する名目は保たれるはずである。

むしろ生命という在り方は、「自らにたえず現前するアンチテーゼとして、脅威として非存在の可能性を自らのうちに抱え込んで」おり、「いつでも死ぬ可能性があること」(Jonas 1979, S. 157)によってより強く自己肯定せねばならないのだから、存在の存続という目的から考えれば最も失敗した在り方であると言えはしないだろうか。生命以外の無機物は、生命と比較して存続の可能性という点では何一つ劣っていない。そのなかでもとりわけ自ら主観性を心的作用で操作せねばならなくなった人間という在り方は、存在的に最も下等な在り方と言えはしないだろうか。

リチャード・ウォーリンはヨナスの人間観に対して以下のように述べている。

むしろ、責任ある態度で自然に関わるのが義務であるのは、人類の生存そのものが賭けられているからなのである。この点でヨナス⁵¹は、流行遅れではあるが、西洋の伝統に対する負債を引きずっている。人間が進化の過程で生み出されたもっとも高貴な被造物であることを彼はいささかも疑わない。(リチャード・ウォーリン 2004, p. 193)

ウォーリンはヨナスを、結局のところ先人の影響から脱し切れなかったのだと考えている。ヨナスは「ドイツの哲学というのはとにかく観念的な伝統がある」と考え、ハイデガーの存在解釈を「実存の具体的な根拠を無視したまま、内面性ばかりに目を向けたこの解釈」(ヨナス 1996, p. 21)と批判している。だがヨナス自身、ドイツ哲学やハイデガーの呪縛から逃れ切れなかったのではないだろうか。

IV. 存在論の確立

では、ヨナスの理論に整合性を持たせるとしたらどのような修正を施せばよいのだろうか。私は、ヨナスの形而上学的解釈に適合するように多様性の概念を修正すべきだと考える。

「存在は、自らに対して中立無関心ではない」(Jonas 1979, p. 144)と述べるように、ヨナスは有

であることを、有が有自身を肯定している状態だと考えている。有はただ無でない状態ではなく、意識的に無でなくなろうとする状態である。一方無について考えてみると、無は完全に中立無関心でありながら、やはり無であろうとしている。もし無が中立無関心であるためにすぐに無の状態でなくなるようなものであれば、有は無に対して何も恐れる必要などない。無にとっては徹底的に無関心であることが自己肯定の手段なのである。

有と無はこのように互いを恐れながら、自らの存続のために力を注ぐ。有にとっては、空間的、量的、質的、時間的変化を続けることが無から遠ざかることになる。しかし継続的な変化は、ただそれだけでは存続の条件とはならない。限度を超えた変化、つまり無条件的な、または無限の変化もまた無の要素だからである。変化の領域が有限でありながら、変化しなければ自らを保てないために、有は目的のための手段を選ばなくてはならない。

このように考えると、有にとっての課題は変化を続けることよりもむしろ、変化の中身をコントロールすることにある。変化はより最適な頻度で、効率よく行われる必要がある。この場合進化論的な多様性は抑制の対象である。最適な一つの変化のために無作為な変化をいくつも生み出すのは変化の無駄遣いである。しかし変化が有の必要な要素である以上、在り方の多様化は避けられない。有は多様化をできる限り抑制しようとするものの、多様化は完全に抑制しきることはできない。新しい在り方は生み出されてしまうのだから、その在り方はより存続に最適な在り方であることが望ましい。抑制された中から現れる多様性は、限られた新しい試みの機会であるため、有効に活用されなければならないのである。

つまり多様性とは、有が無に対抗する上で生じる必然悪だとは考えられないだろうか。既存の在り方が絶対に存続できる保証がない以上、すでに安定している在り方から新しく在り方が生じることを、有はしぶしぶ認めざるを得ない。その代わり有は、新しく生じた在り方に積極的に働きかけ、なんとか存続という目的に適するように変化させていく。存在一般を視野に収めれば、以上のように多様性の概念を解釈する方が妥当であると思われる。

V. おわりに

ヨナスは存在論の必要性を感じながらも、存在の解釈に関する考察は中途半端なままに『責任という原理』を書き上げてしまった。存在は存続を目的とするという考えを切り札にしながらも、語られる多様性の概念は有機体の域を脱していない。このことからわれわれはヨナスの主張に疑問を抱かざるをえなくなる。本人がどれほど存在論だと主張しても、われわれには存在論と有機体論との明解な差異が見えてこない。

以上のように、『責任という原理』における多様性の概念は修正を必要とする不完全なものだった。だが、そのことで倫理学を語る上で存在論が必要であるとのヨナスの見解に傷が付いたわけではない。存在論がより適切に修正されることにより、倫理学の基盤もしっかりしたものになるだろう。今後ヨナスの試みをいかに有効な形で生かしていけるのか、その説明が現在の私の課題である。

注

- 1) 以下邦訳は加藤尚武監訳『責任という原理』を参照し、必要に応じて修正した。
- 2) Artは「種」だけでなく「性質」をも意味する単語なので、der Egoismus der Artは「性質のエゴイズム」と解釈することもできる。しかし『責任という原理』においては主に生命種についての考察で使用されているため、本稿でも「種のエゴイズム」と訳すことにした。
- 3) 柴田有は、グノーシス思想を人間論から捉えようとするヨナスの姿勢を批判している。グノーシス思想と他の思想を分かちものは宇宙論的部分であり、人間論的部分に関してはグノーシス思想を特徴付けるだけのオリジナリティが見られないとする。(柴田有 1982, pp. 50-88)
ヨナスはグノーシス研究においても、過度に人間論的視野から分析しようとしていたと言えるだろう。
- 4) 進化論における多様性概念がしばしば目的を持っているかのように解釈されるのは、進化論自体の成り立ちを由来としている。進化論が科学的であろうとしても、進化論が経済学や社会学と相互的に影響を与え合う関係にあることから、進化論の意図とは異なる目的論的な意向が入り込んでくるのである。また進化論自体が科学的であろうとするために目的論を排除しようとしているにもかかわらず、目的論が排除されていること自体が科学的な根拠に支えられているとの誤解も見られる。進化論は純粋に科学的であることも、また純粋に(目的論をも含んだ)進化の過程を探索することも困難であるというジレンマに陥っているともいえる。
- 5) 原文のまま。「ヨナス」と訳されることが多いが、発音的には「ヨーナス」でも間違いではない。

引用参考文献

- David, J.L., *Hans Jonas The Integrity of Thinking*. University of Missouri Press, 2002
- Heidegger, M., *Sein und Zeit*. Achtzehnte Auflage, 1926
- Jonas, H., *Das Prinzip Verantwortung*. Suhrkamp Verlag, 1979
(ハンス・ヨナス (2000、『責任という原理』(加藤尚武監訳)、東信堂、2000)
- Jonas, H., *Erinnerungen*. Insel Verlag, 2003
- Jonas, H., *GNOSIS Die Botschaft des fremden Gottes*. Insel Verlag, 1991
- Jonas, H., *Leben, Wissenschaft, Verantwortung*. Philipp Reclam jun, 2004
- Jonas, H., *Mortality and Morality*. Northwestern University Press, 1996
- 久米博、「ハンス・ヨナスの未来倫理 ——「生命の原理」から「責任の原理」へ——」(『立正大学文学部論叢』No. 116, pp. 19-42)、2002
- 柴田有、『グノーシスと古代宇宙論』勁草書房、1982
- ハンス・ヨナス、『哲学・世紀末における回帰と展望』(尾形敬次訳)、東信堂、1996
- 的場哲郎、「ハンス・ヨナスにおけるハイデッガー哲学の意味」(『白鷗女子短大論集』No. 24 (1), pp. 1-26)、1999
- リチャード・ウォーリン、『ハイデッガーの子どもたち』(村岡晋一他訳)、新書館、2004

The concept of variety in “The Imperative of Responsibility”

SHIMIZU Shun

Hans Jonas sought to clarify a practical relationship between philosophy and natural science in his book, *The Imperative of Responsibility* (1979) to establish the new ethics. He thought that being had the purpose of keeping itself alive and it made variety a purpose in order to extend the difference between being and nonbeing. However, this concept of variety did not conform well to his ontology because he brought organicism into ontology directly without accommodating their differences. To make his theory consistent, the concept of variety should be accepted not as a positive purpose but as an object for being controlled.